第25回人工透析四国研究会

プログラム・抄録集

会期：平成３年９月28日(土)
会場：徳島厚生年金会館
会長：渡辺恒明
（小松島赤十字病院）

第25回人工透析四国研究会　目次・抄録

1　四国の慢性透析の患者数と推移（開会の辞にかえて）…… *111*
小松島赤十字病院　渡 辺 恒 明

2　透析液中エンドトキシン除去対策の検討（誌上発表）…… *111*
広瀬病院　出 渕 靖 志

3　HPM ダイアライザーのリン除去量……*112*
高知高須病院　浜 崎 能 久　他

4　高性能小膜面積 Dialyzer FB - 70U の臨床評価 …… *112*
松山赤十字病院腎センター　永 見 一 幸　他

5　新しい Triacetate Dialyzer （FB - E）の臨床評価 …… *113*
高松赤十字病院腎センター　筒 井 信 博　他

6　β_2 ミクログロブリン除去における持続治療法の有用性……*113*
川島病院　松 平 敏 秀

7　緊急透析導入時の Blood Access としての内シャント……*114*
川島病院　長内佳代子　他

8　興味あるシャントトラブルの2例…… *114*
松山赤十字病院腎センター　武 田 一 人　他

9　内シャントトラブルの要因の再考
— 聞き取り調査による検討 —……*115*
香川県立中央病院腎センター　宮武企余子　他

10　左鎖骨下静脈機能的狭窄症の1例…… *115*
高知高須病院泌尿器科　山 中 正 人　他

11　血液透析により誘発される上室性不整脈の成因について…… *116*
井下病院　石 川 宗 一　他

12　血液透析により誘発された心室性頻拍症の一症例……116
井下病院　井下謙司　他

13　DHPにより著明な改善がみられた薬剤性せん妄を
来たした腎不全の2症例……117
中村市立市民病院内科　樋口佑次　他

14　二重濾過プラズマフェレーシスが奏効したCrow－Fukase症候群の1例…117
高知県立中央病院人工腎室　城本正義　他

15　急激な腎機能障害を伴ったIgDミエローマの一症例……118
香川医科大学第二内科　藤岡　宏　他

16　後天性腎嚢胞より出血をきたしたCAPD患者の1例……118
国立療養所香川小児病院　浜口武士

17　在宅療法としてのNAPD……119
近森病院泌尿器科　近森正昭

18　血液透析とCAPDの比較検討……119
小松島赤十字病院　渡辺恒明　他

19　本院におけるエリスロポエチン投与患者の看護について……120
南松山病院　相原佐代子　他

20　EPO使用患者のHt上昇による生活面への影響……120
高松赤十字病院腎センター　上河　悦子　他

21　慢性腎不全保存期およびCAPD患者におけるr－HuEPOの効果……121
高知医科大学第二内科　安岡伸和　他

22　透析患者におけるエリスロポエチン効果不良例の検討……121
小松島赤十字病院　木村　秀　他

23　エリスロポエチン投与後、両下肢壊死を来した一例……122
高松市民病院泌尿器科　大森正志　他

24　透析患者の皮膚掻痒症に対するセルテクトの臨床効果について
（特に長期投与における検討）…… 122
松山西病院　東條雅晴　他

25　慢性透析患者における血中心房性ナトリウム利尿ペプチド（ANP）の検討…123
佐川町立高北国民健康保険病院　宇賀茂敏　他

26　当院透析患者におけるhANPの検討 …… 123
竹下病院　原　郁夫　他

27　透析患者の肺結核症…… 124
小倉診療所　小倉邦博　他

28　三豊総合病院におけるC型肝炎抗体の検討 …… 124
三豊総合病院内科　広畑　衛　他

29　当院におけるHCV抗体陽性血液透析患者の現状……125
佐木川　光　他

30　HCV感染対策　―透析室における現状― …… 125
香川労災病院　山地秀子　他

31　パーソナルコンピューターによる透析データの処理…… 126
高知県農協総合病院　中山拓郎　他

32　Disopyramide（Rythmodan）により低血糖を
きたした血液透析患者の一例…… 126
香川県立中央病院内科　三宅　速　他

33　透析患者の服薬状況についての検討
―より残薬を少なくするための看護指導― …… 127
大樹会回生病院　山地和子　他

34　種々の合併症をきたした腹部大動脈瘤患者の看護…… 127
医療法人川島病院　真鍋恵美子　他

35　血液透析とCAPD通院患者の日常生活能力の比較 …… 128
小松島赤十字病院　内藤由美　他

36　CAPD患者のQOL向上への援助　―CCPDを導入して― …… 128
三豊総合病院　松浦三紀子　他

37　導入期指導が自己管理状況に及ぼす影響 …… 129
松山赤十字病院腎センター　池内和歌子　他

38　水分管理の再検討と看護について …… 129
阿波病院　武田潤子　他

39　透析患者における体重管理の検討 …… 130
大川総合病院透析室　六車すみえ　他

40　外来透析患者における自己管理の再検討 …… 130
高知高須病院附属安芸診療所　岡林祐見子　他

41　透析患者の機能回復への組織的活動 …… 131
高知高須病院　三好可奈　他

42　7年間経過を観察しえた胸部大動脈瘤を合併した慢性血液透析患者の一例 …… 131
中村市立市民病院内科　樋口佑次　他

43　最近経験した透析患者の腎摘除例3症例 …… 132
高知赤十字病院泌尿器科　大田和道　他

44　新しい免疫抑制剤デオキシスパガリンを使用した腎移植の4症例 …… 132
川島病院　長内佳代子　他

45　腎移植後脳梗塞の2例 …… 133
高知県立中央病院移植グループ　森　淳　他

46　嚢胞腎摘出術を同時に施行した生体腎移植2例 …… 133
キナシ大林病院泌尿器科　秋山和己　他

47　腎移植者の心理状態を考える …… 134
キナシ大林病院　門　里美　他

1．四国の慢性透析の患者数と推移（開会の辞にかえて）

小松島赤十字病院
渡辺　恒明

平成3年8月の患者数（人口百万対比）は香川1,099（1,074）、徳島1,006（1,209）、高知889（1,077）、愛媛1,520（1,003）で、平成2年12月の全国平均値835よりかなり高い。特に徳島は昭和62年以来日本一となり、恐らく世界一の数字と思われ、徳島の医療密度が高いことと、移植が少ないことが主な原因と考えられる。

CAPDは香川65（5.9%）、徳島86（8.5%）、高知57（6.4%）、愛媛59（3.9%）で、徳島が最も高い。腎移植は香川、徳島で少なく、高知、特に愛媛で多く行われている。

慢性透析患者数はほぼ直線的に増加していたが、愛媛を除く、香川・徳島・高知の増加率が少し鈍ってきている。全国の統計は四国に数年遅れて、追い掛けているので全国的に増加率が鈍ってくる前兆なのか？生存率は愛媛と徳島が全国平均を僅かに上廻り、香川と高知が僅かに下廻っていて、四国の生存率が良いから患者が多いとは言えない。

2．透析液中エンドトキシン除去対策の検討（誌上発表）

広瀬病院
出渕　靖志

透析液の汚染による逆濾過、逆拡散でのエンドトキシンの侵入が大きな問題となっている今日。当院透析室においてもエンドトキシン濃度をトキシカラーとエンドスペシーを用いて測定し、各種除去対策を試み、その効果の有無について検討した。1番目の方法は3種類のヘモフィルターとPMMA膜を各々ダイアライザーへの透析液供給シリコンホース途中に設置し使用した。2番目の方法は紫外線流水殺菌装置を1番目と同じ場所に設置し使用した。3番目の方法はエンドトキシンフィルターであるTET-1.0をやはり同じ位置に設置し使用した。以上の方法のなかで各種フィルターを用いたものと、紫外線は今回の検討においては無効であった。しかしTET-1.0は劇的な効果が認められた。フィルターの交換時期は今回の検討では1ヶ月であった。

3．HPMダイアライザーのリン除去量

高知高須病院
○浜崎　能久、北代　益孝、吉川　幸秀
山本真一郎、西尾　隆志、柳瀬　安男
田中　　守、三好　裕之

透析によるP除去は、高P血症に重要な是正手段といえる。今回6種類（AM-UP-10、AM-UP-15、AM-UP-18、TF-1100PH、TF-1500PH、FB-150U）のHPM透析器を使って、P除去能を検討した。

P除去量は透析器の膜面積にともなって増加傾向を示し、その量は透析時間4時間、Qb 200mℓ/min、膜面積1.5m²で900～1000mgであり、従来型透析器より高い除去能と思われた。

P除去量とP除去率の間には相関が見られず、P除去性能を表現するには、除去率は適切でないと考えられた。これは、血液透析中に血中内にPが流入しておこるリバウンド現象のためと考えられた。

P除去量と透析前P濃度の間には相関が認められ、透析前P濃度が高いほど除去量が大きい結果となった。

4．高性能小膜面積Dialyzer FB-70Uの臨床評価

松山赤十字病院腎センター
○永見　一幸、大河　　勲、宮田　安治
原田　篤実

【目的と方法】Triacetate膜小膜面積DialyzerであるFB-70Uの臨床評価を、中膜面積のCuprophan膜DialyzerのC-12W、C-15Wを対照として、11名ずつのmatched pairにて検討した。

【結果と考察】試験期間中のFB-70U群でBUN、Cr、UA、Pのダイアリサンスと、BUN、Cr、UAの除去率の低下がみられたが有意差はなく、透析前値ではコントロール群と差はなかった。FB-70U群のβ_2-MG値は透析前値平均70から平均43μg/mℓへ有意に低下し、除去率は平均32%、ダイアリサンスは平均24mℓ/minであった。一方、コントロール群では透析前値が平均60より平均59μg/mℓと変化はなく、β_2-MGの除去はほとんどみられなかった。C-12WよりFB-70Uへの移行は小分子物質の除去において可能であり、β_2-MGの除去、プライミングボリュウムの減少という利点があると考えられた。

5．新しいTriacetate Dialyzer（FB－E）の臨床評価

高松赤十字病院腎センター
○筒井　信博、木村　和哲、詫間　幸広
入口　弘英、宮本　忠幸、田村　雅人
川西　泰夫、沼田　　明、湯浅　　誠

目的：UFRを適度におさえたhigh performance membrane dialyzer（FB－E）の性能および臨床評価を行った。

方法：骨痛、掻痒症を有する透析患者6名に使用し、小分子量物質および低分子量蛋白の除去能、合併症状の変化などを検討した。

結果：小分子量物質の除去能は高く、特に無機燐において高いclearance値を示し、血清中無機燐濃度も有意に低下した。低分子量蛋白の除去能はFB－Uに比べ若干劣っていたが、血清中β_2-MG濃度は3カ月目に有意に低下した。合併症状は一過性にせよ、ほとんどの症例で改善が認められた。

考察および結論：合併症状の改善にはFB－Eによる無機燐および低分子量蛋白物質の除去が関与している可能性が示唆された。UFRの低下のため、使用可能な透析装置が大幅に増え、逆濾過によるエンドトキシンの体内への流入の危険率も少ないことより、使用しやすいdialyzerであると考えられた。

6．β_2ミクログロブリン除去における持続治療法の有用性

川島病院
松平　敏秀

目的：血清β_2MG濃度をできるかぎり低値に維持することは、透析アミロイドーシスの予防のための基本的な考え方であると思われる。今回HFによる持続治療を行ない、β_2MG除去に対する有用性について検討した。

対象および方法：慢性血液透析患者を対象とし、置換液量5 L/日のCAVHFによる連続治療を行なった。フィルターの性能評価を行なうとともに、週に一度の血液透析と持続治療との組合せによる、血清β_2MG濃度の変化についても観察した。

結果および結論：フィルターの連続使用可能期間は3～6日であり、電解質や小分子量物質除去に関しては問題はなかった。また週一度の血液透析と持続治療を組合せることにより、17～20mg/ℓの血清β_2MG濃度を維持することが可能であった。

持続治療法には解決しなければならない多くの問題点があるが、血清β_2MG濃度を低下させるには有力な方法であると考える。

7．緊急透析導入時のBlood Accessとしての内シャント

川島病院
○長内佳代子、田中　幸子、曽根佳世子
河内　　譲、水口　　潤、川島　　周

今回、当院での内シャント作製より使用開始までの期間と、その後の内シャント開存成績について調査し、緊急透析導入時のblood accessとしての内シャントの可能性を検討した。

1985年1月より1989年12月までの間に当院にて血液透析導入となった症例のうち、当院にて内シャント作製術を行った症例122名を対象とした。内シャント使用開始時期別に、I群（0－1日以内に使用）とII群（8日以上に使用）に分け、1991年5月31日の時点における内シャント開存期間等について検討した。

症例数はI群59、II群44で、内シャント開存日数の平均はそれぞれ1024.1日、1041.0日であり、両者間に有意差は認められなかった。また再手術せずに経過している症例は、I群で44名74.5%、II群で30名68.1%であった。

シャントの開存状況からみて、内シャントは作製直後より使用可能であり、緊急透析導入時のblood accessとして選択可能と思われた。

8．興味あるシャントトラブルの2例

松山赤十字病院　腎センター
○武田　一人、久保　充明、森下　和男
原田　篤実

症例1は胸部上行大動脈瘤による左無名静脈の圧迫のため、シャント側の還流障害をきたした症例である。左肘部シャント作成後3週間より左上肢の腫脹、熱感、疼痛がみられ、右上肢の約2倍となったがシャント閉鎖術により改善した。中心静脈栄養やブラッドアクセスでのカテーテル留置による鎖骨下静脈閉塞の報告は多いが、胸部大動脈瘤による無名静脈の圧迫による報告はみられない。

症例2は上肢の高度の動脈硬化症の状態で左肘部内シャントが造設され、術後61ヶ月でスティール症候群による左手掌の疼痛、第4指の拘縮と黒色壊死をきたした症例である。サーモグラフィー、左鎖骨下動脈の血管造影にて確定診断を行い、シャント閉塞術によって切断術に至らず、治癒した。肘部シャントでは注意すべき合併症と思われた。

9．内シャントトラブルの要因の再考
―聞き取り調査による検討―

香川県立中央病院腎センター
○宮武企余子、檜原　豊、岡　典子
重成　順子、村山　克子、谷川　勝彦

目的：内シャント管理に対する指導の充実を図るため、トラブルに結び付きやすい日常生活上の行動を知りたいと考えた。
方法：上肢に内シャントを作成し、透析歴6カ月以上の20名より聞き取り調査を行い、透析歴2年以内と3年以上に分類し比較した。
結果と考察：内シャントの再手術経験者の内44.4％の人が、自己管理が影響したと考えられるトラブルを生じていた。日常生活において手枕の経験がある人は、7名で両群に差は無く、気にせず衣服を選択する人は、8名で2年以内の人に多くいた。また自宅で血圧測定をしない人は、9名で3年以上の人に多くいた。そのため透析歴2年未満の人には、血圧計などの使用方法と共に確実な指導の必要性を、3年以上の人には、体調の変化時には血圧測定をするなど反復指導の必要性を感じた。感染が原因のトラブルは無かったが、半数以上の人がシャント周囲のみの清拭に終わっていたため、積極的な清潔指導の必要性を感じた。

10．左鎖骨下静脈機能的狭窄症の1例

高知高須病院泌尿器科
○山中　正人、戦　泰和、橋本　寛文
竹中　章、湯浅　健司、寺尾　尚民

内シャント造設3年後、顔面、上肢の腫脹、頸静脈および前胸部表在血管の拡張を生じ、シャント結紮にて軽快した左鎖骨下静脈機能的狭窄の1例を経験したので報告する。

患者は40歳男性で、慢性腎不全のため血液透析を施行していたが、透析導入3年後に頸静脈拡張等の静脈圧上昇の所見を認めたため、鎖骨下静脈の閉塞または狭窄を疑ったが、シャント造影では明らかな閉塞や狭窄は認められず、機能的な狭窄と診断した。本症例では鎖骨下静脈透析用カテーテル等の使用歴がなく、シャント造設後、約3年と症状出現までが長く、また透析導入後も著しい高血圧の持続と体重増加率が著明であり、そのためによる鎖骨下静脈への血流負荷が今回の機能的狭窄の原因として推察された。

11. 血液透析により誘発される上室性不整脈の成因について

井下病院
○石川　宗一、井下　謙司

(目的)：透析により誘発される上室性不整脈の成因に関して検討を行う。
(対象)：不整脈群；透析により発作性心房細動又は上室性期外収縮が誘発される患者3名。
対照群；心疾患を有さず透析により上室性不整脈が誘発されない患者3名。
(方法)：透析前後において両群の左房径、左室径、左室駆出率、左室内径短縮率、A/Rを心エコー法にて計測し、又血清Na、K、Cl、Ca、Pi、Ca×Pi、Mg、アルドステロン、ADH、NEFA、hANP、カテコールアミン、ジソピラミド濃度、血液ガス分析値を測定し、比較検討する。
(結果)：左房径は不整脈群において透析前後で収縮末期、拡張末期共に30㎜以上と拡大傾向を認めた。hANPは不整脈群において透析前後共に正常値上限の2～3倍と対照群と比較し高値を認めた。カテコールアミンは不整脈群の一例に高値を認めた。PaO_2は不整脈群の一例に透析後低下を認めた。

12. 血液透析により誘発された心室性頻拍症の一症例

井下病院
○井下　謙司、石川　宗一

症例は65歳男。心疾患の既往あり。糖尿病性腎症よりCRFとなりHDに導入。初回のHD中に発作性心房細動が出現。11回目のHD直後にVTが頻回に出現した。この時のECG、各種酵素の上昇、心エコーより前壁中隔の心内膜下梗塞と判断した。この症例は入院時よりQTC延長があり、HD直後に心筋梗塞を合併するなど心臓そのものがHD時のVT出現の最大の原因であると思われるが、その他の不整脈誘発因子についてVT出現時のHD前後について検討したところ、カテコールアミンはHD前も高値であったが、HD後は更に上昇したこと、および血圧の上昇時にVTの出現頻度が多くなったことから、交感神経系の関与が示唆された。又hANPもHD前後共に著明な上昇を認め、VT出現に影響を与えたと思われた。他のK、Ca、Mg、NEFAの影響はなかったと思われた。その後ECUMを施行したときは不整脈は誘発されなかったので、このような症例にはECUMをHD導入早期から併用する必要性を感じた。

13. DHPにより著明な改善がみられた薬剤性せん妄を来たした腎不全の2症例

中村市立市民病院内科
○樋口　佑次、六浦　聖二、建沼　康男
石川　聖子、鈴記　好博

腎排泄性薬剤の蓄積により精神症状を来たした腎不全患者について報告する。

症例1：65歳、男性。慢性腎不全にてHD中、帯状疱疹発症。アシクロビル250mgを点滴静注し、さらに200mg錠を当日3錠、翌日より1日5錠、計14錠内服。2日後より、せん妄出現。3日目にHD＋DHP施行し、翌朝には症状消失した。

症例2：76歳、男性。右腎結石、胃潰瘍（ファモチジン30mg/日内服中）にて近医入院中急性腎不全（BUN 105mg/dℓ、Cr 13.7 mg/dℓ、K^+7.1 mEq/ℓ）を発症し、せん妄出現。翌日紹介され、HD＋DHP施行し、翌朝には症状消失した。血中ファモチジン濃度は、内服30時間後も110ng/mℓと高値であった。

腎不全患者に投与された薬剤の蓄積によるせん妄は、投与中止のみでも数日後には改善するが、HD＋DHPによりすみやかに症状を改善させておくことは、意識障害時の合併症を予防する上からも重要であると思われた。

14. 二重濾過プラズマフェレーシスが奏効したCrow-Fukase症候群の1例

高知県立中央病院人工腎室
○城本　正義、中村　　達、武田　　功
掘見　忠司、三宅　　晋、高橋　　功
同院神経内科
城洋　志彦、矢吹　聖三

二重濾過プラズマフェレーシスが奏功したCrow-Fukase症候群の1例を経験した。症例は両手のしびれ感、脱力を主訴とする48歳の女性で、免疫グロブリン異常を有し、多発性神経炎、色素沈着、リンパ節腫脹、内分泌障害など多彩な症状を呈しCrow-Fukase症候群と診断された。治療として計6回の二重濾過プラズマフェレーシスを実施したところ、著明な筋力の回復と、色素沈着の改善を認めた。本症例は、プラズマフェレーシスにより何らかのtoxicな物質が除去されたことを示唆するもので、本症候群の病因を考えるうえで、貴重な症例であると考えられたので報告する。

15. 急激な腎機能障害を伴ったIgDミエローマの一症例

香川医科大学第二内科
○藤岡　宏、国宗由美子、青野　正樹
平川　ふみ、田中　秀樹、山本　徳寿
高橋　則尋、隅蔵　透、由良　高文
万代　尚史、湯浅　繁一

症例、43歳、男性。原因不明の急激な腎機能低下のため当科入院となった。入院時、腎機能障害（BUN 103mg/dℓ、Cr 10.8mg/dℓ）とともに、貧血、CPKの異常高値を認め、さらに血清IgDの上昇、免疫電気泳動にてIgDλtypeとBence Jones蛋白λtype、骨髄穿刺にて形質細胞の著増がみられ、IgD型多発性骨髄腫と診断した。入院後、血液透析と併行し、MEP-V療法を1クール行い、さらに血中IgDおよびBence Jones蛋白除去を目的として血漿交換を計3回施行した。その結果、血清IgDは著減し、徐々に利尿を認め、いったん透析を離脱するに至った。その後、肺炎により敗血症を併発し、再び乏尿となったため週3回の透析導入となったが、安定した経過で現在に至っている。本例では、当初のIgD型多発性骨髄腫による急激な腎機能低下が、化学療法と血漿交換併用療法により、血清IgDの低下と並行して明らかに改善しており、併用療法の意義を考える上で興味ある症例と思われた。

16. 後天性腎嚢胞より出血をきたしたCAPD患者の1例

国立療養所香川小児病院
浜口　武士

もともと嚢胞がない腎に両側性の多発嚢胞が出現するものと定義される後天性腎嚢胞は1799年Dunnillらが血液透析の患者の腎に嚢胞や腫瘍が発生することを初めて報告して以来数多くの報告がなされている。

今回本疾患を有するCAPD患者を経験したので報告した。

症例は18歳の男性、原疾患は巣状糸球体硬化症、昭和57年7月血液透析に導入、昭和59年7月CAPDに移行。

現病歴は平成3年7月17日午前3時、下腹部痛出現、その後肉眼的血尿を経験し、それから腎部の疼痛をきたしたため当院受診。超音波検査およびCTにて嚢胞よりの出血を確認。出血は自然止血した。

今回問題となった出血に対しての対策としてはエリスロポエチンの投与、輸血、手術による腎の摘出などが考えられるが今回の場合はエリスロポエチンがかなり有用であることが判明した。

17. 在宅療法としてのNAPD

近森病院　泌尿器科
近森　正昭

始めに：CAPDのバッグ交換は簡単ですが、バッグ交換が負担となり抑うつ的になったり、多重障害者でバッグ交換ができない場合があり、在宅NAPDをおこないました。

対象と方法：CAPD患者34名中4名で家族がバッグ交換をしており、その中2名と山仕事をしている1名でJMSのSNAPを使い、在宅NAPDを行いました。

結果：家族介護の2名で介護時間を減らすため、山仕事の患者で昼の交換ができないためにNAPDをおこない、注排液異常もなく安定した透析がおこなわれましたが、透析効率は20%程度低下していました。

考察：在宅NAPDがやり易くなるためには、機械が安く操作が簡単で、警報音も鳴らずに音が静かである必要があり、JMSにてタイマーと電磁弁で1バッグづつ注排液する自動機械を試作しました。

結語：1日に2時間40分かかる交換時間を20分に減らして、交換の負担が減りました。

18. 血液透析とCAPDの比較検討

小松島赤十字病院
○渡辺　恒明、榊　　芳和、阪田　章聖
木村　　秀、須見　高尚、下江　安司
日野　直樹

昭和57年11月以後の新規導入患者140のうちCAPDは47（34%）である。同条件下に比較するため、高齢者、糖尿病、重症心疾患、HDよりの移行例を除外したHD 43例（46%）とCAPD 18例（38%）を比較した。

導入直前の男女比、平均年齢も41歳と39歳、クレアチニンも15.2と14.9、BUNも130と132、Htも21.1と21.5で殆ど同じで、平均透析期間が5年1月と3年5月であった。

CAPDでは、予想に反し痩せていた。クレアチニンとBUNは、HD前後の中間値で比較すれば差はないが、CAPDでは正常値を維持する症例がある。HtはCAPDが約4%高く、心胸比に差はなく、血清蛋白とアルブミンはCAPDでやや低く、β_2ミクログロブリンは48.7対27.6でCAPDが低い。コレステロールはCAPDで正常値の上限で、PTHもCAPDがやや低い。生存率は良く、7年95%、8年HDが94、CAPDが60となったが、死亡数が少ないので有意差はない。

19. 本院におけるエリスロポエチン投与患者の看護について

南松山病院
○相原佐代子、松末　婦美、河野美枝子
瀬野　晋吾、日形　昌人、藤山　　登
尾崎　光泰

目的　腎性貧血に対して、エリスロポエチン（EPO）が用いられ貧血改善が認められている。今回、EPO投与により透析患者の自覚症状、生化学検査および血圧の推移について検討し、看護について報告する。
対象および方法　本院透析患者でEPOを投与している54例にアンケート調査を行い、また、86例のHt値、血小板数、血清鉄、血圧の変動について経過をみた。
結果及び結論　EPO投与後、めまい、立ちくらみ、動悸、息ぎれなどの自覚症状および生化学検査は改善されたが、血圧に関しては上昇する傾向がみられ、降圧剤の投与量が増加した。看護においては、血圧の管理に注意し検査データーの把握とか、ダイアライザーの残血などに注意し血栓にも留意しなければならない。

20. EPO使用患者のHt上昇による生活面への影響

高松赤十字病院腎センター
○上河　悦子、上原　孝子、小村　良子
多田　栄子、大井　益子

目的：EPO使用による貧血改善に伴い患者に及ぼす影響を知り、今後の看護と指導への指標とする。
対象及び方法：透析患者57名を対象に、EPO使用前後の他覚的検査データ及び、自覚症状の改善度からアンケート調査を行ない改善度をポイント制としその関連性を分析した。
結果：①EPO使用前後3ヶ月のアンケート調査による評価では、有効症例64.9%、無効症例35.1%であった。
②BUN、Cr、Ca、P、K、TPにおいては、有意差は認められなかった。
結論：EPO使用により慢性透析患者の貧血改善によって生活面、身体面に良好な結果が得られた。

21. 慢性腎不全保存期およびCAPD患者におけるr-HuEPOの効果

高知医科大学第二内科
○安岡　伸和、川田　益意、吉田　健三
佐藤　一成、久武　邦彦、末廣　正
山野　利尚、橋本　浩三

慢性腎不全保存期患者およびCAPD患者に対しr-HuEPOの有効性を検討した。対象は保存期患者6例、CAPD患者7例である。まず保存期患者においては、EPO投与量6000単位/週で、無効の2例は9000単位/週に増量し、8週間の経過を観察した。Htは開始前25%が8週後には31%に増加した。この間の心房性ナトリウム利尿ペプチド、血漿レニン活性、血漿アルドステロン、アンジオテンシン変換酵素、アンジオテンシンI、IIの変動は有意でなかったが、アンジオテンシン変換酵素とHtの変動率には逆相関の傾向にあった。この機序は不明で今後の検討を必要と考えた。CAPD患者におけるEPOの投与量は1500－6000単位/週でHt 21%から8週後25%と有意に増加した。保存期患者、CAPD患者ともに腎機能障害の進行はみられず、血圧上昇の程度も軽微であった。さらに輸血をしていた保存期患者の1例、CAPD患者の2例ともにEPO投与後輸血が不必要となった。以上のことから保存期患者、CAPD患者のEPO投与量は週1回6000単位が基本であるとの成績を述べた。

22. 透析患者におけるエリスロポエチン効果不良例の検討

小松島赤十字病院
○木村　秀、阪田　章聖、榊　芳和
須見　高尚、下江　安司、日野　直樹
渡辺　恒明

EPOを最低4カ月以上使用した、HD 19例、CAPD 7例の低反応例について検討した。投与方法はHD 1500 uを週2回、CAPD 3000 Uを2週間に1回施行。EPO 3カ月間投与の上昇率はHDで76.6%～－9.8%、平均27.8%で5%以下の症例は2例であった。CAPDでは上昇率52～－3.6%平均14.2%で、上昇率5%以下は4例であった。又、HD、CAPDとも透析期間と上昇率との間に相関はなかった。HD、CAPDともフェリチンと上昇率との間に相関は認めなかった。鉄剤の併用では上昇率の高い症例が多かった。初期フェリチン値が高値でも、鉄剤を併用しても反応しない例が5例あり、この低反応例の原因に炎症、HPT、高アルミ血症、低Kなどが考えられた。長期ではHDは鉄欠乏性が1例から7例に増加し、CAPDは4例から1例に減少しCAPDは鉄欠乏性になりにくいと思われた。フェリチンの測定を経時的に行い鉄剤を補充しつつ、低反応には他の抑制因子を考えそれに対処する必要があると思われた。

23．エリスロポエチン投与後、両下肢壊死を来した一例

高松市民病院泌尿器科
○大森　正志、平石　攻治
内科
栗永　篤信
外科
小笠原邦夫

慢性透析患者の腎性貧血に対する遺伝子組換えヒトエリスロポエチン（以下rh-EPO）の投与は極めて効果的であるが、長期使用に伴い副作用として高血圧、血栓症、高カリウム血症などをきたす症例が認められる。

今回rh-EPOを投与後約3ヶ月で、両下肢の壊死を来し死亡した症例を経験したので報告する。患者は65歳の女性で、悪性関節リューマチを有し、透析歴は約9年である。平成2年5月15日よりrh-EPO 1500単位×3/Wを投与したが貧血の改善は著明で、Htの上昇率は最大約3%/Wとなった。このことが血栓症の原因かと思われた。従って悪性関節リューマチや糖尿病などの血管性病変の合併例では、Htの上昇率を1%/W以下にする、Htを26～27%以下に維持するなど、より慎重な投与が必要と思われる。

24．透析患者の皮膚掻痒症に対するセルテクトの臨床効果について（特に長期投与における検討）

松山西病院
○東條　雅晴、多嘉良　稔
愛媛県立中央病院
赤松　明
松山赤十字病院
原田　篤実
南松山病院
白形　昌人、瀬野　晋吾

1．中等症以上の掻痒感をもつ慢性腎不全患者を対象としてセルテクトを長期投与し、本剤の止痒効果ならびに安全性を検討した。

2．解析対象症例45例（中等症例19例、重症例26例）についてセルテクト投与前と試験終了時の部位別掻痒の推移を比較したところ体幹、背部、上肢ならびに下肢において有意な改善が認められた。

3．セルテクトを6ヶ月以上連日経口投与可能であった症例は、解析対象症例45例中35例（77.8%）あったが1例に眠気を認めた（副作用発現率2.1%）ものの特筆すべき副作用は認めず、安全性は高いと思われた。

4．本剤は透析時に認められる掻痒感に対し、やや改善以上、やや有用以上ともに75.6%と優れた臨床効果を認めた。

5．慢性腎不全の皮膚掻痒症に対して特効薬のない現在、セルテクトの高い有効性、有用性は臨床上試みる価値のある薬剤であると思われる。

25. 慢性透析患者における血中心房性ナトリウム利尿ペプチド（ANP）の検討

佐川町立高北国民健康保険病院
○宇賀　茂敏、近藤多喜男、青木　秀俊
加部　一行、松本久幸代、前田　憲秀
吉田　禎宏
高知医科大学第2内科
川田　益意、山野　利尚

血液透析患者の良好な体液調節の指標としての血漿心房性ナトリウム利尿ペプチド（ANP）について、今回は体重および心胸郭比（CTR）との関係を検討した。対象症例は、当院の血液透析患者16例（男10、女6、平均年齢は62歳）である。血液透析患者のANP値は、透析前は296.3 pg/mℓと著しく高く、透析後は105.1に低下（p＜0.01）していたが、なお正常値の上限よりも高値であった。この透析前のANPは、その時の体重とは関係なく、体重の増加率と有意に正相関していた。透析前後のANPと体重の各減少率間に有意な相関はなかった。透析後のANPは、血液透析前のCTRと正相関（p＜0.001）し、CTR 50%のANPは100 pg/mℓであり、透析患者の良好な体液調節には透析後のANPを100 pg/mℓ以下にすることが望ましく、dry weight設定にも参考にすべきと考えた。またANPの測定は、透析後のみでよいと思われた。なお、透析前のCTRは、同じ時のANPとは無関係で、透析前後のANP減少率と有意に負相関していた。

26. 当院透析患者におけるhANPの検討

竹下病院
○原　郁夫、土田　均、竹下　篤範

〔目的〕血中心房性ナトリウム利尿ペプチド（hANP）が、ドライ・ウェイト設定に有用か否かを検討した。〔方法〕透析患者16名（男9名、女7名）、年齢平均59.6歳（39～82歳）、透析期間平均14.4箇月（2～61箇月）、糖尿病3名、非糖尿病13名。透析前後でhANP、体重、平均血圧（MBP）、心胸比（CTR）、Vascular Pedicle Width（VPW）、Hb、Htを測定した。〔結果〕①hANPは透析前198.5±117.0pg/mℓ、後96.5±71.1 pg/mℓと透析後には低下した。②hANPと体重、Hb、Htには相関がなかったが、hANPとCTR（r＝0.39、p＜0.01）、hANPとMBP（r＝0.61、p＜0.01）の間には相関がみられた。③VPWは透析前51.8±4.6mm、後は49.4±4.1mmと減少したが、CTR、hANPとの相関はみられなかった。以上、hANPはCTR、MBPと相関がみられ、循環血液量を反映しているとおもわれ、すでに指摘されているように、hANPとCTRの両者を測定することで、より適切なドライ・ウェイトの設定が可能になると思われる。

27. 透析患者の肺結核症

小倉診療所
○小倉　邦博
徳島大学泌尿器科
神田　光則、滝川　浩、香川　征
徳島県立中央病院泌尿器科
炭谷　晴雄

症例1：61歳、男性。慢性透析3年2カ月。不明熱持続と右胸水貯留が診断の契機。喀痰抗酸菌塗沫検査にてGaffky 3号。KM、PAS、EBによる抗結核療法にて発熱、呼吸障害ともに消失し、抗酸菌塗沫検査も陰性化。KM副作用の聴力障害が出現。INH、RFPによる治療を継続中。

症例2：74歳、男性。慢性透析2年9カ月。胸痛、咳嗽、不明熱の持続が診断の契機。喀痰抗酸菌塗沫検査にてGaffky 1号。RFP、INH、EBによる抗結核療法にて症状は消失し、抗酸菌塗沫検査も陰性化。副作用なく、治療継続中。

結論：透析患者における不明熱、呼吸器症状の出現に際しては肺結核を考慮する必要がある。RFP、INH、EBによる抗結核療法が推奨される。副作用に対する十分な注意が必要と考えられる。

28. 三豊総合病院におけるC型肝炎抗体の検討

三豊総合病院　内科
○広畑　衛、都嵜　和美、年森　司
守田　吉孝
泌尿器科
陶山　文三

三豊総合病院の維持血液透析患者82名（男：46、女：36名、平均年齢：53.7±13.2歳、平均透析歴6年6ヶ月）を対象として、C型肝炎抗体について検討した。方法は1）PCR法によるHCV-RNAの検出　2）各種HCV抗体の測定を行ない、透析歴・肝機能との相関について調査した。

その結果PCR法陽性者30名（37%）であったが、HCV抗体はC100：21%、CP-9：29.6%、CP-10：25.9%、N-14：25.9%と差があった。PCR陽性者と透析歴は有意に相関し、肝機能異常者は陽性者中僅かに16.7%であった。

29. 当院におけるHCV抗体陽性血液透析患者の現状

○佐木川　光、三宮　建治、櫛田　俊明
安藤　道雄、山崎　真一、安藤　勤
浅井　晶子

〈対象と方法〉当院で血液透析中の患者72名について、HCV抗体をEIA法で測定し、輸血歴、透析歴、血清GPT値の異常、との関連について検討した。

〈結果〉HCV抗体陽性者は72名中25名。陽性率34.7%。輸血歴（＋）は15名、（－）は10名。又、輸血歴（＋）者38名中15名（39.5%）及び輸血歴（－）者34名中10名（29.4%）が陽性者であった。透析歴が長くなる程陽性率が高くなる傾向であった。GPT上昇の既応は陽性者のうち21名（84%）にあったが、4名（16%）にはなかった。

〈考察〉25名中10名の無輸血者があり、感染経路の解明と感染防止対策が必要。又、GPTの異常のない陽性者も認められ、定期的なHCV抗体検査が必要と思われる。

30. HCV感染対策 ― 透析室における現状 ―

香川労災病院
○山地　秀子、棚田　裕子、村井　澄枝
入江　幸子、品川　克至

近年C型肝炎抗体の測定が可能となり、当院では本年6月、透析患者全員にHCV抗体測定を行い、25例中8例（38%）に陽性者が出た。

そこで、HCV抗体と輸血歴、輸血量、HCV抗体価とGPT値との関係を調査し、更に、感染ルートの一つと考えられる、血液による感染防止対策を検討した。

HCV抗体陽性者8例全員に輸血歴があり、輸血歴のある18例では8例（44%）に、HCV抗体が陽性であった。輸血量とHCV抗体陽性率の関係はなく、HCV抗体価とGPT値も、相関関係は認められなかった。

以上により、血液を介したHCV感染が予想されるため、感染対策としてハード面とソフト面で検討し、B型肝炎に準じた感染予防対策が必要と考えられた。

31. パーソナルコンピューターによる透析データの処理

高知県農協総合病院
○中山　拓郎、山本　律子、松山　美子
中村　隆子

透析療法に関するデータの一元的管理とスタッフの患者支援のためのシステムを開発した。コンピューターにはMacintoshを、プログラムはExcelを使った。看護婦による入力は体重や血圧などのデータだけと簡便化し、血液検査の結果はフロッピーディスクから直接読み込んだ。

患者用として透析に関する情報が4枚に渡って月2回印刷され、各個人に簡単な説明とともに渡される。

透析形態に変化がなかった8名でシステム導入の効果を1年前の同時期で検討すると、透析間の体重増加量は1.75±0.56kgから1.57±0.52kgへ、また血清カリウムは5.02±0.63 mEq/Lから4.99±0.45 mEq/Lへと改善した。

32. Disopyramide（Rythmodan）により低血糖をきたした血液透析患者の一例

香川県立中央病院　内科
○三宅　　速、山本　修平
循環器科
小林　功幸、安倍　行弘、武田　　光
外科
多胡　　護

Disopyramide（DPM）投与により低血糖を来した慢性血液透析患者の一例を報告した。症例は61歳男性。17年の糖尿病歴があり、1年前より血液透析に導入されていた。心筋梗塞を合併しDCM様の心不全状態にあった。発作性心房細動に対しDPM 300mg/日投与し6日目に血糖値37mg/dℓと低下した。比較的高齢者、腎不全、糖尿病、心不全、食事摂取量の低下、など低血糖を起こしやすい状態に加え300mg/日の過剰投与が原因と考えられた。また本邦報告例29例について、HD/DMの有無で分類し統計学的に分析し検討した。HD＋DM群はDPM投与による低血糖発作の強い誘因となり、またHD群および非DM群では発作が重症化しやすいことが示唆された。更に本剤投与に際しては非DM患者にも、或は長期間安全に投与中であっても患者の背景因子の変化により、低血糖発作の起こり得ることに十分留意すべきであると考えられた。

33. 透析患者の服薬状況についての検討 — より残薬を少なくするための看護指導 —

大樹会回生病院
○山地　和子、三谷　享用、片山　治子
高嶋　正明、市原美津子、富田　拓実
三好　通子
山北　勝寛（ソーシャルワーカー）

目的：透析患者の服薬状況、薬の理解度、残薬とCMIとの関連性について調査を行いそれらの問題点を検討し指導した。方法：残薬のないグループ（A群）と残薬のあるグループ（B群）に分け、残薬、意識度、CMI健康調査を実施した。結果：A群は薬剤に対する理解度が高く、CMIにおいても良好だった。B群は残薬が多く、理解度も低かった。CMIも領域Ⅲ、Ⅳに属していた。まとめ：残薬は、自覚症状の反映しない薬剤に多かった。残薬の多い者は、理解度が低かった。透析導入期と長期透析患者に残薬が多くCMIも領域Ⅲ、Ⅳの者が多く見られ精神的援助の重要性が再認識された。

34. 種々の合併症をきたした腹部大動脈瘤患者の看護

医療法人　川島病院
○真鍋恵美子、三浦はるみ、葛籠　昌代
福島　広江

腹部大動脈瘤切迫破裂から、緊急手術となり種々の合併症を引きおこした慢性腎不全症例を経験したので報告する。

症例は74歳女性。原疾患は慢性糸球体腎炎で、1987年1月に尿毒症症状が出現し、血液透析を開始した。1991年6月6日、腹痛出現し腹部大動脈瘤切迫破裂と診断し、6月11日腹部大動脈瘤切除及び置換術を行なった。術中より出血凝固異常、術後に創部治癒障害などを合併した。一般看護に加え、開放創の感染予防、出血予防、家族への精神看護につとめたが術後53日目に多臓器不全で死亡した。

慢性腎不全患者には、予期せぬ出血傾向や創傷治癒障害が潜んでいる可能性があり、術前術後の管理に細心の注意が必要であると考えた。

35. 血液透析とCAPD通院患者の日常生活能力の比較

小松島赤十字病院
○内藤　由美、一宮　智子、渡辺　和子
岩本さき子、尾嶋　美恵、加地　環
遠藤　智江、新田　高子、渡辺　恒明

外来通院後6ヶ月を経過したHD38名、CAPD18名に対してアンケート調査した。社会復帰率はHDの男女とCAPDの女性は高く、CAPDの男性は合併症と職捜し中の症例があり低かった。カルノフスキースコアでは社会復帰はHD、CAPDともに95%と良好で、非社会復帰のCAPDは合併症を有する症例があって60%と低い。常勤と臨時の有職者の仕事に対する満足度はHD、CAPDともに高く、自営業は低い。給与生活者はかなり優遇されているが、自営業では自分が働かなければ収入がない。主婦業はCAPDが満足度が高く、HDより適していると思われた。1ヶ月の拘束時間は、CAPDが短いが、排液に長時間を要する者とHDを併用する者で、平均すればHDより長くなった。スタッフの診療時間は、HDの36時間10分に対し、CAPDは2時間30分で大きな差があったので、CAPDが自立していると考えるが、その反面孤独となりやすい。

36. CAPD患者のQOL向上への援助 —CCPDを導入して—

三豊総合病院
○松浦三紀子、小林　英子、斉藤アヤ子
山西マサミ、広畑　衛

〈目的〉　従来のCAPDでは生活活動範囲が制限され、患者に束縛感を与えていると考えられた。そこで、CAPD患者のQOLを高める方法としてCCPDを導入することになり、患者指導について検討した。
〈対象および方法〉1）21歳の男性患者にCCPDについてのパンフレットを作成し、教育指導を実施した。2）CCPD患者とCAPD導入6年目の患者に対し、生活状況を知るためにQOL評価表を用いて調査した。
〈結果〉患者はCCPDの導入により、入院前とほぼ同じ社会生活が送れるようになり、QOL評価表の結果でも満足度が高かった。しかし、自己負担額が多いことや、夜間の体動制限のあることが問題として残っている。

37. 導入期指導が自己管理状況に及ぼす影響

松山赤十字病院腎センター
○池内和歌子、前川ミツ子、渡部　映子
宮部　和代、内田　淑子、久松　末子
原田　篤実

目的：導入期の患者指導が、自己管理状況にいかなる影響を与えたかを検討した。

対象及び方法：過去5年間に当院で慢性血液透析へ導入された患者のうち、導入時のチェックリストが実施され、1年以上経過観察ができた27例を対象とし、チェックリストの評価と1年間の自己管理状況の関係をみた。

結果及び考察：導入期チェックリスト良好で1年間の自己管理状況が良好な者11例、両者とも不良な者5例、チェックリスト不良で自己管理良好の者9例、チェックリスト良好で自己管理状況不良の者2例であった。チェックリスト不良で自己管理良好な者では、個々に応じた指導の工夫が、チェックリスト良好で自己管理不良例では、評価に対する安心感からの指導不足がうかがわれた。

38. 水分管理の再検討と看護について

阿波病院
○武田　潤子、大塚　正子、坂野　里美
加藤美佐子、福田　道子

目的：血液透析装置やダイアライザーの進歩により、有害物質や水分除去が容易におこなえるようになった。その反面患者の水分管理が十分出来ないなどの問題が生じ、体重増加がめだって多くなってきた。そこで当院で血液透析をうけている患者66名を対象に、水分管理を中心に自己管理意欲の向上を試みた。

方法：水分管理食事管理の勉強会をおこなう。体重増加一覧表を掲示する。個別に評価をおこなう。体重増加率の高い人は個別に指導。

結果および考察：体重増加率は、大幅に減少した。一覧表の掲示が自覚を促すのに効果があったと思われる。自己管理意欲を高めるためには、ただ押しつけるのでなく、受容的態度で援助をおこなうことが大切だと思う。看護者側も水分管理を継続指導することの重要性を再確認した。今後体重増加率の特に高い人には、家族指導、家庭訪問などを行って、患者の社会的・精神的背景をも理解して、問題解決にとりくむことを課題としたい。

39. 透析患者における体重管理の検討

大川総合病院透析室
○六車すみえ、石井美千代、稲田真由美
河野　　明

目的：日常生活の充実を図り体重管理困難な患者の持つ問題を明らかにし今後の指針を得る。対象および方法：透析患者26名男（14名）女（12名）について平成2年5月までの体重増加率と関連事項の実態調査、平成2年6月から3ヶ月毎に個別指導を行い体重管理困難者について看護記録から患者の問題を分析した。結果：体重増加率男性は3.18±0.83%、女性は4.89±1.13%と有意差を認めた。体重増加率と食事摂取量は相関を認めず水分摂取量は正の相関、尿量は負の相関を認めた。身体的問題には、患者の誤った知識、習慣などが原因となっており、心理社会的問題は個々の症例で異なっていた。結論：患者は生理的口渇のみで飲水するのではなく心理社会的問題が生じた時に自我を水分摂取により認めている事が考えられる。看護婦は患者の問題や疾病の理解を深め能力やニーズに合わせた段階的指導が必要であり、患者には透析と共に生きる事への理解と洞察を進める事が重要である。

40. 外来透析患者における自己管理の再検討

高知高須病院附属安芸診療所
○岡林祐見子、久保田千津子、谷岡美詠
中川きぬ枝、小松　由佳、小松　登美

〔目的〕自己管理指導方法を再検討した。
〔対象および方法〕転入患者3名を対象とし、腎臓の働き、シャント、日常生活、食事についてアンケートを作成、看護婦による聞きとり調査後、再指導を行った。
〔結果および考察〕患者の反応をみると導入期すぐに指導を行っても理解できていなかった。その為、以下のことが考えられた。①患者と看護婦とのコミュニケーションがうまく取れた時に行う。②自己管理が患者自身の責任であることを自覚するように援助していくことが大切である。③より効果的な指導を行うには、時期、場所、方法を個々により選ぶ必要がある。④患者の社会的、精神的背景を理解し、具体的な指導に結び付ける。⑤家族を含めた繰り返しの指導が大切である。

41. 透析患者の機能回復への組織的活動

高知高須病院
○三好　可奈、宮本真奈美、松木　　礼
依光美恵子、吉村多津子

高齢化社会の到来に伴い、高齢患者の透析導入も、全国的に増加傾向である。当院でも、平成3年8月31日現在、65歳以上の透析患者数は、27%を占める。若年者導入に比べ、高齢患者の場合、寝たきり、もしくはそれに近い状態が続くケースがみられる。又、長期透析患者の中にも、運動機能低下をきたす場合もある。それらの予防と改善をしていく為に、各部署間で連携を図る必要があると考え、平成3年5月より、リハビリテーションチームを結成し、成果を得たので、その経過と現状を報告する。

42. 7年間経過を観察しえた胸部大動脈瘤を合併した慢性血液透析患者の一例

中村市立市民病院内科
○樋口　佑次、六浦　聖二、建沼　康男
石川　聖子、鈴記　好博

透析患者の心血管系合併症のうち大動脈瘤は、頻度は少ないが重篤なものの一つである。症例は、60歳男性。10ヶ月前にHD導入。血痰、咳、嗄声にて胸部レ線撮影を行ったところ、左肺門部に腫瘤状陰影を認め、胸部CTにて上行～弓部の嚢状胸部大動脈瘤と診断された。血清梅毒反応陰性より、成因は動脈硬化性と考えられた。TG 36mg/dℓ、T・CHO 90mg/dℓ、〔Ca〕×〔P〕は54で、PTH-Cは0.56 ng/mℓであった。高血圧は降圧剤でよくコントロールされ、経過中に降圧剤不要の時期もあった。瘤径は、CT上発見時5.2cmより経年的に増大し、7年後腎癌及び消化管出血にて死亡する前には、7.7cmとなっていたが、破裂を来たすことなく経過した。本例は心電図上、陳旧性心筋梗塞を疑わせる変化があり、E.F. 30%以下と心機能も低下しており、手術は断念したが、透析患者に合併した大動脈瘤としては、内科的治療のみで比較的長期間生存の得られた症例であった。

43. 最近経験した透析患者の腎摘除例3症例

高知赤十字病院　泌尿器科
○大田　和道、黒川　泰史、中村章一郎

慢性腎不全患者が透析治療に導入されると患者の腎に対する関心は薄れる傾向にあったが、近年、長期透析療法中の患者の腎では多嚢胞化萎縮腎の出現から、腎癌などの様々な病態が新たに出現することが確認され、それに伴って透析患者に腎摘除術を施行する機会が増加している。

今回、我々は透析治療中の患者で後腹膜膿瘍、腎腫瘍、特発性腎出血で腎摘除術を施行した3症例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告した。

44. 新しい免疫抑制剤デオキシスパガリンを使用した腎移植の4症例

川島病院
○長内佳代子、水口　潤、曽根佳世子
河内　譲、川島　周

新しく開発された免疫抑制剤塩酸デオキシスパガリン（DSG）を、今回、腎移植後の急性拒絶反応4症例に使用した。

症例は、生体腎移植後2カ月ないし2年10カ月後に出現した急性拒絶反応で、MPのpulse療法に反応せず、DSG 5－7 mg/kg/dayを5ないし7日間点滴静注した。

結果は、血清Crのベースラインまで低下した著効例2症例、radiationを併用して血清Crの上昇を抑えられたやや有効例1症例、無効例1症例であった。

副作用としては、2例に全身倦怠感、1例に顔面のしびれ感をみとめた。また全例に骨髄抑制が出現したが、投与開始後20日前後で改善されている。

以上、DSGは移植後の急性拒絶反応に対し有用と考えられるが、投与時には骨髄抑制に注意を要する薬剤であると思われる。

45. 腎移植後脳梗塞の2例

高知県立中央病院移植グループ
○森　　淳、松田　浩明、武田　　功
三宅　　晋、堀見　忠司、中村　　達
高橋　　功、近藤　慶二

腎移植後の重篤な合併症として、腎動脈血栓症をはじめとする動・静脈血栓症の報告がなされているが、最近当院において、腎移植後に脳梗塞を生じた2例を経験した。

1例は12歳女性で、移植後10日目に右半身麻痺をみ、CTにて左前頭葉梗塞と診断され、抗凝固線溶療法にて完治退院した。1例は46歳男性で、退院後26日目突然意識レベルの低下をきたし緊急入院となった。CTにて多発性梗塞と診断され、抗凝固線溶療法を行うも症状の改善を認めず、真菌による呼吸器感染を合併し死亡した。

2症例は若年であり年齢的要因も考えられず、また脳梗塞発生の基礎的疾患も認められなかった。誘因としてステロイド投与による凝固能亢進、多血症等の関与が考えられるが、他施設の報告にも詳細は明らかでない。しかし、死に到る重篤な合併症であり、術後管理において慎重な注意が必要と考えられる。

46. 嚢胞腎摘出術を同時に施行した生体腎移植2例

キナシ大林病院　泌尿器科
○秋山　和己、杉元　幹史
内科
大林　　幸、大林　誠一、鬼無　　信
香川労災病院　泌尿器科
西　　光雄
市立宇和島病院　泌尿器科
万波　　誠

巨大嚢胞腎患者2例に対し、嚢胞腎摘出と同時に生体腎移植術を施行した。症例1は39歳男性、16年間の血液透析後腎移植した。後天性腎嚢胞あり、3年前、腎癌合併の疑いあり、左腎摘出していた。傍腹直筋切開にて経腹的に嚢胞腎を摘出し、腹膜を閉じて、右腸骨窩にドナーの左腎を移植した。摘出腎は1070gだった。手術時間4時間15分だった。病理検査にて右腎内に腎癌を認めた。症例2は51歳女性。常染色体優性嚢胞腎症で血尿、側腹部痛を訴えていた。6か月の透析後母親をドナーにして移植した。上腹部正中切開で両側嚢胞腎を摘出後、一度創を閉じて右腸骨窩に移植した。摘出腎は右1630g、左1730gだった。顕微鏡下に血管形成術を行い移植した。手術時間7時間だった。2例とも術後合併症はなかった。

腎移植時に嚢胞腎摘出を同時に行っても問題はないと思われた。

47．腎移植者の心理状態を考える

キナシ大林病院
○門　　里美、植村　敏江、中村　成美
宮崎　智子、細川　智子、柴田江美子
西山　京香、松尾奈緒美、大平　悦子
松永美代子、日高　千里、黒葛原安子
大林　弘子、松木千恵子、広田ひとみ

1　研究目的

腎移植者の増加にともない、腎移植者の心理状態を加味した看護がこれから重要であると考えられる。

2　方法

当院で透析を受けていた腎移植患者に対しアンケート調査を実施した。

その結果、現在までの透析治療に対する位置づけは、拘束、束縛であった。腎移植に対する位置づけは、最後のかけ、一番の治療法、透析から逃れたいというものであった。移植を決意させたものは、腎移植経験者からの情報がかなり多かった。移植に対する不安としては、移植の失敗、拒絶反応、ドナーの健康面に対するものであった。不安の除去としては、ひらきなおり、素直な心、身を医療にあずけることであった。

画一的な看護では変化するレシピエントの状況に対応しきれなくなっている。状況に応じて臨機応変に看護することが重要である。